

香港洞穴探検隊と天坑探検記

岡 晃子 (Akiko OKA Japan Exploration Team 所属 京都府在住)

〇はじめに

ここ数年、年2～3回の頻度で中国にケイビングに行っている。それで、中国の特集を組むにあたって何か書いてほしいという依頼をケイビングジャーナル編集部からいただいたのだが、中国の洞窟やカルストについて曖昧な知識しかないので、専門的なことは何も書けない。ただ、いつも私がお世話になっている香港洞穴探検隊のことや、一ケイパーの視点から見た中国らしさを紹介できればいいなと思い、筆を取ることにした。

中国の洞窟といえば、ミャオティンのようにダイナミックなイメージがある。中国には未調査の石灰岩エリアも多く、数キロレベルの大きな新洞もたやすく発見されてしまう。日本とは一味違ったケイビングが体験できるのは、確かに刺激的だ。また、洞窟だけでなく、古い文化と新しい文化がごちゃごちゃ入り混じる地方都市の雰囲気も味がある。次々に新しい道路や高層ビルができあがっていくエネルギー感も面白い。実際に行くまでは、大した関心はなかったのに、中国という国はあらゆる角度から興味深く、そこに心を奪われた。

中国でのおもしろエピソードは沢山あるけれど、特に広西 (Guanxi) での探検は、私がまだ中国についてよく知らなかった頃の出来事で、私の中に新鮮な衝撃を残したので、その時のことを書いておきたいと思った。しかし、その前に、私がどうして中国に行くようになったかを書いておこう。

〇香港洞穴探検隊 (Hong Kong Cave Exploration Society) との出会い

私は中国語が話せず、中国で車も運転できない (注1)。その不自由の下で、私が洞窟に行けるのは、ひとえに香港洞穴探検隊の隊長である Pang Duck (鴨仔・パンダック / 彭德明) のおかげだ。

彼女と出会ったのは、2016年にイングランドで開催されたユーロスペレオだった。アジア系の参加者がほとんどいない中、草原の向こうから黒髪の小柄なケイパーがニコニコしながら歩いてきて「どこから来たの?」と尋ねてきた。それが Pang だった。ユーロスペレオの会場で、ビールを傾けつつ、中国の洞窟話を聞いた。当時の私は、なにがなんでも洞窟に行きたい熱意に溢れていたから、彼女の話聞きながら涎が垂れそうな顔をしていたのかもしれない。帰国してから、Pang は中国での活動に声をかけてくれるようになった。

Pang から香港洞穴探検隊の名前を聞いた時、え? 香港で? 洞窟? と耳を疑った。香港といえば、中国大陸の端の点みみたいな所だし、石灰洞があるようには思えなかった。事実、香港の地質はほぼ火山岩と花崗岩だ。だから、彼らの活動エリアは主に中国内地で、ケイビングのために飛行機や高速鉄道で国境を超えなければならない。

香港チームのリーダーである Pang は、元々趣味でロッククライミングやアイスクライミングをやっていた。しかし、ある日突然「洞窟にこそ真の探検がある!」と目覚めたらしい。重慶探検隊副隊長の小葱 (XiaoCong・シャ

オツォン / 劉佳) の下でケイビングを学び、2016年に6人の仲間と香港洞穴探検隊を立ち上げた。香港唯一のケイビングチームである。

世界的に話題になった2018年のタイの洞窟事故の際に、彼らは洞窟の専門家として香港メディアの取材を受けた。それを通して、香港の人たちの間でも、少しずつチームやケイビングの存在が知られるようになったらしい。今では彼らは、セミナーの講師として招かれ、一般の人に向けて、洞窟やケイビングの知識を紹介することもあるそうだ。

入隊希望者も多そうだなと思ったが、Pang に聞くと、希望者をすべて受け入れる訳ではないという。チームの雰囲気や馴染むかどうか、洞窟の保護や安全の重要性を理解し、真剣に取り組む熱意があるかどうかによって、希望者の中からチームに入れるメンバーを選んで



左から、Pang、小葱、岡、近野さん。重慶にて。

(注1) 国際免許証が通用しないので、長期間のビザがなければ車の運転免許が取れない。